

ハッジー巡礼

(前半)



一年に一度の、あの時期がやって来ました。そう、世界中のムスリムたちがせわしくなる時期です。彼らの心の故郷が、彼らをいざないます。それは、愛おしい神の御殿を訪れる時期であり、「故郷」に帰る時期なのです。それはカアバ聖殿を訪れる時期です。すべてのものを後に残し、神に従う時期であり、儂い現世を放棄し、神の家を訪れる時期です。それは、ハッジー巡礼の時期なのです。それが可能な人々は、マッカへと旅し、それが叶わない人々は、どこにしようと、犠牲祭を祝うことによってそれに参加します。

ハッジとは愛情の記念であり、信仰の祝賀でもあります。私たちは、アブラハムによる究極の愛の犠牲をミナーで記念します。私たちは彼の妻ハガルによる、息子イシュマエルへの前例なき愛情、そしてサファーとマルワの荒野における、神意への揺らぎなき信頼を記念します。私たちは、最終啓示が下されたアラファの地で一日を過ごすことによって、神による最も偉大な恩恵、クルアーンに敬意を示します。私たちは、カアバを直接目の前に礼拝をすることにより、信仰を祝います。

ハッジはまた、自制心を養う行為でもあります。世界中のムスリムは棺桶に収められる状態を連想させる、2枚の白い布を上下にまといます。それは現世からの死、そして真の家へと向かうことを象徴します。彼らは負債を返済し、皆からの許しを求めて別れを告げ、神と会うために現世での死を覚悟します。こうしてカアバを目指すハッジの準備は完了します。

カアバは特別な場所であり、それは最初の人間によって築かれた、最初の崇拝の家です。神は旅をするよう、アダムに命じました。彼は数ヶ月間歩き続け、神の導きによってマッカに辿り着きました。そこで彼は、神のために家を築くよう命じられました。これが、人類にとっての最初の崇拝の家なのです。ここが、彼が最初に愛すべき御方との別れを嘆き悲しんだ場所であり、ここが彼が楽園での栄光を失ったことに対し、数え切れない程の涙を流した場所です。またここが、私たちが神へのお近づきを求める場所であり、ここが私たちが神への親密さを求める場所なのです。この家こそは、可視宇宙・時空の遥か彼方に位置するもう一つの家原型であり、地上での滞在にも関わらず、愛すべき御方の御殿における、神の定めへの調和としての最初の行為なのです。

カアバは特別な場所であり、それは一時失われましたが、愛すべき御方は、アブラハム（神の称賛あれ）をこの聖地へと導き、御殿を再建する使命をお与えになりました。我らの父は、その息子イシュマエルを伴ってこの聖なる使命に携わりました。数カ月にわたり、父子は灼熱の砂漠の太陽の下、永久なる神への愛情に燃えつつ、汗を流して働きました。この選択は、無作為のものではありません。アブラハムはこの仕事をするために選ばれた者なのです。毎年、人々はズル＝ヒッジャ月の10日に、この祝福された家を訪れます。この祝福された日に、神はアブラハムが究極の犠牲を捧げるよう命じ、彼はそれに応えました。アッラーはアブラハムが彼の息子イシュマエルを犠牲に捧げることを命じ、彼はその実行を決意したのです。

カアバは特別な場所であり、その基礎はアブラハムの家族の愛情と信仰によって築かれたものです。私たちはその場所を訪れ、愛を記念します。私たちはその場所を訪れ、信仰を祝います。アブラハムは真の意味で、自らの身を神に委ねていました。彼は何よりも神を愛していました。神は彼に、彼が自分の息子を犠牲に捧げている夢を見させました。その夢は繰り返されたため、彼はそれが単なる夢ではなく、永久なる御方による暗示であることに気が付きました。彼はその夢の詳細を息子に告げると、彼はそのことにためらうことなく同意しました。それが神のご意思によるものであることが分かると、息子は何も言い逃れをしようとはしませんでした。神のご意思が達成されることは、始めから分かっている結論なのです。父子は定められた場所に向かいました。彼らが目的地に到達すると、息子は父に、愛情によって神の命令に背く気を起こさせないために、彼が目隠しをするよう提案しました。アブラハムがナイフを振りかざそうとしたその瞬間、息子は子羊に取って代わられました。この日、この時は聖なるものとされたのです。毎年、この日になると数百万人がここを訪れま

す。数百万の人々が、ミナーの峡谷で二人の足跡をたどるのです。人々は二人が止まった場所に止まり、二人が歩いた場所を歩き、究極の犠牲が捧げられた場所にまで足を運びます。ここで、人々は神への愛情から犠牲を捧げ、現地の貧しい人々にそれを分け与えます。そして、こよなく愛する息子を捧げることをも厭わなかった、アブラハムによる神への燃えるような愛情と信仰に思いを馳せます。そこに行くことの出来ない人々は、どこにしようともこの犠牲を祝います。神への愛情は、祝賀されて然るべきものです。

(後半)

カアバは特別な場所です。私たちは、アブラハムと彼の息子の信仰と勇気を記念します。私たちはまた、ハガルの母親としての愛情も同様に祝います。母親の愛とは無私無欲であり、人の愛としては最も高い段階のもので、ハガルはこの愛情に関して素晴らしい例を示しました。彼女は、この愛情を、神への揺るぎない信頼と結び付けたのです。アブラハムは妻である彼女とまだ乳児だったイシュマエルを、それ以前はカアバだった塚に連れて行くよう命じられました。この全く人気も水源もない荒野において、彼は2人を置き去りにし、少しのナツメヤシの実と、少しの飲み水の入った小さな袋を残して立ち去りました。ハガルは彼の後からこう言いました。「アブラハムよ！あなたは私たちを残してどこへ行くのですか？この溪谷には私たちの相手をしてくれる人たちもいませんし、何一つありません！」

彼女は何度も繰り返しましたが、彼は後ろを振り返りませんでした。そして彼女はこう尋ねました。「これは、アッラーがあなたに命じられたことなのですか？」

彼は言いました。「そうだ。」

彼女は言いました。「そうなのであれば、かれは私たちを疎かにはされなんでしょう。」

これは、何という神への信頼感でしょうか！ 彼らは、全能なる神による供給があることを確信していました。神はこの上なく供給される御方なのです。イシュマエルの母ハガルは、イシュマエルに乳を与え、手持ちの水を飲みました。それがなくなると彼女の喉は渇き、イシュマエルも同様に渇きから激しく泣き出しました。彼女はそれを見るのに忍びなくなり、そこから最も近いサファアの丘に登って誰かがいないか探しましたが、誰一人として見つけることは出来ませんでした。そしてサファアを下

りると、彼女は衣服をまくりあげ、焦燥に駆られて溪谷を走りぬけ、マルワの丘にたどり着いて辺りを見回しましたが誰も見つけることが出来ませんでした。彼女はそれ（サファーとマルワ間を駆け抜けること）を7回、繰り返しました。神はこうした無私無欲の母親の愛情を愛され、かれの聖殿への巡礼者たちが同じことをするよう、定めたのです。

彼女が（最後に）マルワに着くと、声が聞こえてきたため、それに耳を澄ませました。彼女は再び、声を耳にしました。彼女はこう言いました。「おお（あなたが誰であれ）、あなたは私にあなたの声を聞かせました。私を助けてくれる何かをお持ちではないでしょうか？」すると、彼女はザムザムの場所で天使を見いだしました。天使は踵で土を掘り、そこからは水が溢れ出て来たのです。彼女はその周りを手で掘って水たまりを作りました。そして革袋に水を汲み始めました。それは彼女が汲み取った後も湧き続けました。神によるこの素晴らしい恵みは、現在も未だに止まることなく続いています。数百万人が毎年、この聖水を飲み続けていますが、この泉は依然として枯れることはないのです。マッカは特別な場所です。

アブラハムの家族による、2つの記念すべき出来事を祝い、私たちはアッラーの御意は、最も善きことをもたらすことを思い起こします。最終的に、アブラハムの家族には最善のことがもたらされました。私たちも神にすべてを委ね、かれを信頼するのであれば、同様のことがもたらされるのです。私たちは神から来て、そして神へと戻るのですから。

カアバは特別な場所です。皆が一様に、控えめな白い衣服をまとった3百万人もの同胞と過ごすのは圧倒的なことです。最も地位の高い王から、最も地位の低い労働者まで、同じ格好をします。彼らは肩を並べて立ち、道を歩き、お互いに平和の挨拶を交わすのです。あらゆる人種は平等に混ぜ合わさります。黒、白、黄、茶色の人々は、愛してやまない神の前にて調和します。神の前に、それを邪魔する要素は何もありません。そこでは、神こそが重要なのです。顔を上げ、目の前にキブラを見るのは素晴らしいことです。我々は毎日5回、聖カアバを向いて礼拝しますが、彼らはその威厳と栄光を目の前にするのです。彼らは故郷に帰ったかのような高揚感を感じながら、こう口を合わせます。「ラッバイカッラーフンマ・ラッバイク・ラッバイカ・ラー・シャリーカ・ラカ・ラッバイク（馳せ参じました。アッラーよ、私は馳せ参じました。あなたに同位者はありません。）」

私たちは口を合わせて公言しつつ到着し、聖カアバを中心に周回します。地上における柱であるその場は、私たちの人生で神を中心にするこ

を思い起こさせます。そこで私たちは、神を私たちの人生の中心に据え、私たちの存在の中心とすることを思い起こさせられるのです。

アッラーよ、あなたの家を訪れるという祝福を許された、私たちのムスリム同胞のハッジをお受け入れください。私たちにもいつの日か、あなたを訪れるという祝福をお授けください。アッラーよ、あなた以外に愛、崇拝、そして身を委ねるに相応しい御方はいません。あなたを愛し、崇拝し、身を委ね、あなたの御意に従うことが出来るようお許しください。アーミン！